# シボ族における民族的カタチ(1)

丸　山　孝　一

# The Form of Xibe Ethnicity

Koichi Maruyama

キーワード：文化のカタチ、民族性、民間伝承、喜利媽媽
Key Words: Culture Form, Ethnicity, Folklore, Xilimama

## はじめに

シボ（錫伯）族は中国東北部および北西部、新疆ウイグル自治区に居住する少数民族である。シボ族の歴史は中国語の文献でかなり明らかにされているが、わが国では未だ十分に紹介されていない。

本論では、中国東北部と北西部に集中居住する民族集団シボ（錫伯）族の民族的アイデンティティの具体的な手がかりとなるカタチを求め、これを民族的カタチという概念を用いて説明しようと試みるものである。シボ族研究でもっとも興味深い点は、これまでにも指摘したように(2)、歴史的に起源を同じくする一つの民族が、東西に別れ、東の民族は周辺の異民族の中に文化的に同化され、ほとんどその民族的特徴を喪失してしまったのに、西のシボ族は周囲をイスラム教徒に囲まれながら、これに同化することなく、民族的特徴とアイデンティティを過去240余年にわたって保持してきたという対照的な歴史過程である(3)。東シボ族には満族、漢族、蒙古族など、民族的により親近性のある諸民族がいたのに対し、西シボ族に隣接していたのは、宗教的に根本的に異なるイスラム教徒のウイグル族、カザフ族などであり、異民族ながら社会的経済的には交流してきたものの、食習慣、年中行事、言語など、日常生活の基本的な面で大きくかけ離れていたため、これらの民族と通婚することがなく、その結果、西シボ族は伝統的な民族文化を維持することができたのである。

ここで言う東シボ族と周辺諸民族との民族的親近性とは、もちろん相対的概念であり、またその反対概念である西シボ族と周辺イスラム所属との非親近性といえども、絶対的な対立概念ではない。しかし、現実には東シボ族は満族や蒙古族や漢族と通婚するほどには近親性があったと言うべきであり、逆に西シボ族にあっては、四周の諸民族と経済的社会的にはきわめて近い協力的親和関係があったにも関わらず、ただ一点、宗教信仰の面においては、シボ族はイスラム化することなく、いわば孤高を守ったとも言えるのである。しかし、宗教信仰ただ一点とはいえ、これによって言語、食物、通過儀礼、年中行事等に及ぶ一連の生活習慣や世界観が異なることになるので、宗教の違いがシボ族を周囲の諸民族から分かつ中心的要因であったということが出来る。

東シボ族における異民族との通婚とこれに伴う文化変容の実態と、他方、西シボ族における民族内婚とこれによる（と考えられる）民族文化の持続の相異はどこから来るのか。このコントラストは他にあまり類を見ないほどの貴重な研究材料を提供しているテーマであると考えられる。東シボと西シボとは、単なる地理的遠隔性ばかりでなく、時系列的、あるいは歴史的に、少なくとも過去約240年間、全く異なる経過を経ており、両者を比較研究するためには、それぞれの民族的アイデンティティが維持、または変容する過程を示す何らかの理由または拠り所を具体的に見届けなければならないであろう。

そこで、本論では主として西シボ族の中に見られる民族的アイデンティティの具体的様相を探り、これを民族的カタチとして提示してみたいと考える。隣接しながら習合しない宗教的異化現象を現実に体験する人びとの手がかりとして、民族文化の具体的カタチを求めようとする。それは当事者の感覚として自他の民族性の異同に関する自覚を求めると同時に、第三者としての異邦人、または人類学者にもそれぞれの民族文化の存在を認めさせる手がかりとなろう。

## 民族的カタチの概念

民族が独自の民族としてのアイデンティティを保持し、自らを他と区別するには、それなりの拠り所がなければならない。アイデンティティとは本来、心理学的概念であるが、これが民族集団において用いられる場合、民族集団構成員相互間に共通の、何らかの具体的シンボルが必要である。アイデンティティが集団への帰属意識を表現することであれば、それは共同体の他の構成員と共有されるものであり、その事実を共同体構成員相互間において意識し、確認する作業が行われる。従って、アイデ

ンティティとは、単なる個人的内面の心理学的現象のみには止まらない。

ある民族を他の民族から区分するものが心理学的現象だけではない以上、そこには何らかの客観的マーカーがあるはずである。それは何か。また、それは当該民族自身がマーカーと考えると共に、他の民族がこれをどのように認識するか。また、このように自他を区分するマーカーは、単一のものなのか、あるいはいくつかのものが集合体となっているものであろうか。

複数の民族を区分するものは、もちろん空間的な区分線、境界線ばかりではない。スターリンの有名な民族の定義（1954）には、言語や意識と共に、居住地の同一性が含まれているが、東と西に遠く3500キロを隔てて住むシボ族の場合、もちろんこの定義には該当しない。自他の民族を区分するものは、物理的空間的なものもあるが、むしろ日常生活の中における最も身近でわかりやすいものから、より抽象的で象徴的なものに至るものが数多くある。最も目立つ、わかりやすいものとしては、民族衣装や民族建築があり、抽象的、象徴的なものとしては言語や宗教の行動面から意識的な面、あるいは芸術活動の諸側面がある。

これらは、民族集団を内的に一体化するのに機能的である。また、他民族のそれを外部から見た場合、自民族のそれと比較して、その異質性故に、文化的隔たりを感じせしめる機能がある。前者は集団の内的統合に寄与し、求心的に作用するが、後者は対外的に異質感を与えるが故に排他的であり、遠心的に作用する。つまり、民族の区分に機能するものは、民族的求心性と民族的遠心性という逆のベクトルに作用する裏腹な関係にあると言えるであろう。このように、民族の区分作用をもつものを、ここでは民族のカタチと呼ぶことにする。

各民族は、民族のカタチをもつが故に、集団的特色を持つと言える。ある民族が民族としての独自性をもつという場合、そこには区別されるべき隣接の民族からばかりでなく、第三者からもそれと判るある種の明瞭な特徴があるはずである。例えば、南タイ地方で、タイ族と混在して住むマレー族でイスラム教徒の村人たちの家々は、なぜか青いペンキで塗られたものが多かった。もちろん、タイ族の家屋敷には、彼らの民間信仰であるピーの精霊を祀る祠（いわゆるピーハウス）があることが多いので、すぐに識別できるし、そのほかにも、高床式住宅の階段数は、必ず奇数であることから、すぐにタイ族の家であることが判るのである。しかし、両者とも小鳥を籠につるして飼う習慣があるため、この点では区別がつかなかった。

民族のカタチというべきものは、おそらく無数にあるが、それらは次のようないくつかの種類と段階とに分けられよう。

(1) 物質的な生活用品に見るカタチ《物質文化》
(2) 生産様式に関する民族のカタチ《生産様式》
(3) 言語的、意味論的カタチ《言語》
(4) 家族・親族的カタチ《親族》
(5) 儀礼的、宗教的カタチ《儀礼》
(6) 五感や芸術的感覚に訴えるカタチ《感性》

周知の通り、ルース・ベネディクトは文化の型という概念を提唱した（1934）が、その場合、型ということで彼女は各民族の特徴を端的に表現しようとした。たとえば、日本文化は恥の文化、西欧キリスト教文化は罪の文化、米国ニュー・メキシコ州のプエブロ・インディアンはアポロ型、北米平原インディアンや太平洋岸のクワキュウトル族はディオニソス型という具合に分類したことはよく知られている。しかし、この類型化はあまりにも大づかみでありすぎるという批判を招いた。それは一つの文化を全体として取り上げ、その特徴を直感的に一言で表現しようとしたところに無理があったからであるが、本論で言うところの民族のカタチとは、上記の通り、一つの民族の文化を表す多くの諸特徴をカタチとして表現しようとするもので、ベネディクトの「型」概念とは全く質を異にする。

上に掲げた諸類型は試行的なもので、更に慎重な検討を要するものである。それらは部分的に重複するとも考えられようが、ここでは操作的な仮の類型であると考えている。はじめのものは、具体的な生活物資を中心としているが、後段のものは抽象的で象徴的なものが多い。以下、これらを簡単に検討してみる。

(1) 《物質文化》 物質的生活用品の中に、民族のカタチを見いだすことが出来る。例えば、民族衣装、台所用品、食器具、家具、建築用具、等々である。しかし、他方、民族衣装の中には、(2)として分類されるべき生産過程で用いられる作業着のようなものもあり、また晴れ着の如きは、(3)に分類されるべき民族の美的感覚を反映するものがあろう。しかし、いずれにしても、生活物資の段階で、民族の特徴を表す具体的なものは数多い。

(2) 《生産様式》 生産様式に関するものとしては、生態学的諸条件の下で、ずいぶんはっきりした特徴が表れる。例えば、狩猟や耕作の方式、漁法のやり方など、各民族の特徴を占めるカタチは多種多様である。しかし、同じ生態学的環境の下にあっても、必ずしも同じような文化のカタチや装置があるとは限らないので、それぞれに個別の民族的特性を現すカタチを採り上げる必要がある。

(3) 《言語》 民族の言語や意味論的カタチは、言語そのものに本来的に備わったものである。二人の人間の間でコミュニケーションが成り立つということは、両者をひきつける社会的引力が成立することであり、同時にそれはコミュニケーションが成立し得ない関係における離反作用が働くことを意味している。し

たがって、同一言語を共有する民族内では、それだけでも民族の集団的凝集性、連帯性が強化されると考えることが出来る。さらに言語の共有とは、単なる意思疎通というばかりでなく、超世代的に財産を共有しているという共同体意識が働き、祖先伝来の神話、伝説、民話等がさらに構成員の連帯を強化するのに機能する。これら民間伝承としてのフォークロアの姿を知ることによって、民族の独特なカタチを知ることになる。

(4) 《親族》 同一民族は同一祖先に起源を発するという意識がある。前項における祖霊の観念はこの項と共通するところがあるが、言語の共有という面とは別に、血縁としての所与の関係性を自覚し、相互に再確認するということは、民族としての一体感と独自性を意識し、そのアイデンティティにカタチを付与するものである。祖先の中でもその元祖ともいうべき開祖は、しばしば神秘的な存在として意識されており、それ故に民族の構成員に対して、デュルケーム（1895、1952）の謂う社会的拘束性を課するものである。もちろん、民族の系統性に関しては、各民族の出自に関する規定があるが、その範囲内で家族、親族の独特なカタチが求められる。

(5) 《儀礼》 儀礼、特に宗教的儀礼は、前項で触れた祖霊祭祀と密接な関連を有している。また、それは出生、婚姻、葬儀などの人生儀礼とも密接な関係を持つ。さらに、それは(4)項で述べた神話など歴史観、生命観など、民族の精神性と深く関わっている。それ故に、儀礼は民族の神聖さの感覚を一定の状況設定の中で言語的、音響的、色彩的、視覚的の表出するパフォーマンスを伴う。従って、それは(3)で述べた感性と裏腹の関係があり、いわゆるエトスの具体的カタチとも言える。

(6) 《感性》 五感や芸術的感覚に関わる分野に属する民族のカタチは実に多い。食文化から衣装文化、建築文化、民族的意匠とも言うべき個性的デザインや色彩配列、食物や香料や線香の匂い、民族音楽や民族舞踊における音曲やリズムや所作・振る舞い、そして(1)の建築様式や(5)の宗教的儀礼などにかかわることが多いが、光や明るさと闇との独特の組み合わせの仕方の中に、民族の独自性、カタチを見て取ることが出来る。

以上の６つのカタチは、それぞれ民族の特性を表出するものではあるが、もちろんこれらのみに限定されるものではないし、これらのいくつかは、上に指摘したとおり、相互に関連し、組み合わされていて区分しがたいところがあるが、これらは一応の試行的な概念の整理に過ぎない。以下、シボ族の場合を例にとって、これらの各カタチに応じて具体的に民族のカタチを描いてみたい。

## 西シボにおける民族的カタチ

以上のような文化のカタチに関する提唱は文化体系の全てを網羅するものではなく、その特徴のいくつかを描写しようと試みる段階にある。従って、これをシボ族の現実に当てはめる場合にも、シボ族の完全な全体像を記述的に説明するものではない。むしろ、ここで狙うところは、シボ族がもつ民族的特質を民族誌学的に理解し描写するための手がかりとなるものを探求しようとするものである。はじめからシボ族ないし何らかの民族の文化的全体像があって、それを説明するのではなく、その逆に民族文化の部分を組み立てて、最後に全体像を描こうとする帰納的作業の過程である。この際、民族文化の特徴ある諸部分を、上記のようなカタチとして表出しようとするものである。

従って、ここに取り上げる各カタチはけっして初めから民族文化の全体像を表わすものではなく、そういう意味では「不完全」なカタチである。他にもさまざまなカタチがあり得ることを前提に、民族文化の諸相を見る。しかし、諸カタチは単なる断片ではなく、何らかの意味で相互に有機的な連関性をもち、それらが民族文化としての統合的一体性をもつ。そのことは当該民族の構成員自身が意識的または無意識的に統一して捉え、その全体像をあるいは政治的に、あるいは感性的に表現しようとしているのである。

上記した６つの民族文化のカタチを、以下シボ族の場合に当てはめて例示する。単なる例示ではなく、これらのカタチをより総合的に組み立て、全体として立体的な民族文化像を描き出したとき、より完全な民族文化のエスノグラフィーが出来上がるであろう。以下の記述は、そのための予備的試みである。

(1) 物質文化のカタチ　シボ族の人びとにとって特有の物質文化とは何か。包括的な観察を完了したとはとてもいえないが、これまでの現地訪問によって得られた資料を基に言えば、まず民家（農家の場合）の構造にシボ族独自の特徴がある。民家は東西に長い長方形で、南向きである。土壁の表面に白石灰を塗り固めて光沢を出す。チャプチャルでは、家屋の外側の壁を薄い青で塗った家屋を数多く見た。三部屋の家屋が多いが、家族数が多いと五部屋の場合もある。中央部の南側に出入り口があり両端に物置（哈什包）がある。西側（入り口から入って左側）に大きな部屋があり、真ん中の部屋は堂屋（正房、母屋）である。堂屋の左右に鍋台（つまり竈）がある。ここから左右の部屋の床下を竈の煙が通り抜けるオンドルとなる。各部屋の中では南側、西側、北側の三面にオンドルがあり、同じ部屋でもオンドルのある方が上座で立派な絨毯が敷かれ、上客をそこに座らせる。普通、西側の部屋に年寄りが休み、東の部屋は子どもたちが寝る部屋である[4]。

子どもが寝起きする部屋には、シボ族独特の天井から吊るされた揺りかごがある。かなり高い天井裏から吊りさげられているので、揺られる籠のスイングはかなりゆっくりとしたテンポになっている。この揺りかごがシボ族の特有のものらしい。

(2) 生産様式のカタチ　西シボ、特にチャプチャル（察布査爾）に住むシボ族の基本的な生業形態は農業である。西シボのシボ族は主にチャプチャルとは、シボ語で豊かな穀倉地という意味である。そこは東北地方より西遷した祖先が開墾して造った耕地であるが、現在では土壌が肥沃で気候も比較的温暖であるため、各種の農作物の栽培が行われている。主な農作物は、小麦、玉蜀黍、水稲、大麦、高粱、きび、豆類などである。他にごま、菜種などの油類がよく穫れる。

チャプチャルの南側には海抜1600メートル以上の烏孫山山区があり、最高峰の主峰白石峰は海抜3,480メートルである。これらの高原は万年雪があるため、豊かな水資源を提供し、農業と牧畜が可能となっている。このような農業や牧畜は、特にシボ族だけに限られた生産様式ではないが、シボ族は東西に分かれる以前、東北地方に住んでいた頃から弓術が得意であったが、シボ族にとって弓術は武術としてばかりでなく、狩猟生活においても有効な生産手段であった。

18世紀以前に遡っても、シボ族は狩猟を農業と共に、重要な生業としていた。大興安嶺（蒙古自治区）から嫩江流域[5]に出た頃、農業や牧畜をしたが、戦火のために農業経済は常に不安定であり、狩猟は彼らにとって重要な補助的生産手段であった。清朝初期の頃は、少なくともシボ族の一部が朝廷の中央部に直接所属していたので、例えば松の実、貂の皮、薬用人参、蜂蜜、鰉魚などを奉納し、「ブテハ」と呼ばれ知られていた。乾隆29年（1764年）、命により約4000名のシボ族の兵と家族は瀋陽を出発し、翌年新疆ウイグル自治区伊犁地方に到着したが、新開拓地で直ぐには耕作もできず、そのため狩猟に頼るほかはなかった。幸い近くの伊犁河岸一帯には芦や灌木が多く、そこには野ウサギ、イノシシ、鴨などが生息していたため、シボ族はこれを格好の獲物とすることができた。また、西となりのカザフスタンには草原が広がり、野生動物が多かった。南側の烏孫山は草木豊かで、山上には鹿、山ヤギ、ノロ、狐、野ウサギなどが多かった。

このようにして、シボ族は得意の弓術を生かして新しい西部の開拓地において生きてゆくことが出来た。そのため、彼らの得意とする弓術は、チャプチャルばかりでなく、広く内外に知られるようになった。このことは、シボ族自身にとってより一層自信を持つことになり、これがかれらの民族の誇りとなっていった。特にロサンゼルスにおけるオリンピック大会にアーチェリーの中国選手として出場したことは、彼らが中国人としてのアイデンティティを強化することになり、また日頃はほとんど目立つことのないシボ族にとって民族的自覚と自信とを獲得するいい機会であった。ここでわれわれは、弓術・アーチェリーが民族のカタチとしての意味をなしていることは明らかであろう。

(3) 言語文化のカタチ　東シボ族は現在、完全に漢語漢文を使っているが、それでも彼らははっきりシボ族であると自称している（それはそれとして、極めて興味深い現象である。）。しかし、新疆ウイグル自治区における西シボ族の言語文化は、過去240余年間、異民族と接しつつ共存してきたにもかかわらず、ほとんど原形を保ったまま、東シボ族が喪失した言語を持ち続けているという点で、極めてユニークであり、それ故に、西シボ族のシボ語は、民族文化の最も独特なカタチとして特筆に値する。

シボ語は本来アルタイ語系満・ツングース語族満語支に属している。新疆ウイグル自治区でシボ語が使われている主な地域は、チャプチャル錫伯自治県の他、霍城、塔城、鞏留、伊寧、ウルムチなどである。満語との関係は深く、今日の言語学者たちは、シボ語が満語を基礎に発達したと認識している[6]。シボ語の約80パーセント以上は満語からの借用語である[7]。清代以前には、シボ族は一種の「非清非蒙」語、すなわち満語でもなく蒙古語でもない言語を使っていたという記録もあるというが、今日多くの人びとの理解するところでは、その言語はジフシ語と呼ばれるものである[8]。

シボ族は満族に征服されると、満洲八旗に編入され、その後次第に満語に変わっていった。清朝政府が「国語騎射」すなわち満語の使用と騎馬術および弓術の練習を欠かさないことを国策としてたびたび強調したが、しかし、満族の官僚や兵士たちはこの命令を守ろうとはしなかった。1764年、約4000人のシボ族が東北を出てチャプチャルに至り、西シボとなるわけであるが、西シボ族はこれを忠実に守ったばかりか、満語満文をしっかり守り、1948年になると、西シボ族の研究者たちは伝統的満語に改良を加え、これを発展させた。たとえば、発音が重複している13の字母を除去したり、シボ語としての音はあるのに文字がないため、３つの字母を造った。現在では40個の字母がある。シボ語には、母音には長音短音の区別がないこと、複合母音が比較的多いこと、母音和階（調和）の現象が多いこと、体詞[9]には数や格の範疇があることなど、言語学的な特徴がある。

このように見てくると、シボ語は原郷の東シボにおいては滅びたが、遙か3500キロ離れた西シボにおいては維持され、しかも言語学的に改良、補強、整備されたのである。そのことは、シボ語がウイグル語、カザフ語など、異質の言語文化に取り囲まれているにもかかわらず、自他共に認める民族文化の具体的で最も代表的なカタチの一つであることを明示していると言えよう。

言語の発達は、同時に文学の発展を促す。シボ語の文

学としては、書面文学と民間文学がある。前者は作家文学とも称され、印刷された普通の文学作品で、多くの小説家、詩人、そして翻訳家を輩出している。後者の民間文学は口頭文学とも呼ばれ、民歌を特徴としている。これは叙事詩、苦歌、シャーマンの歌、頌歌、勧導歌、習俗歌、田野歌、狩りの歌、恋の歌、宴歌、格言歌、新民謡などに分けられる[10]。この他、民話、神話、伝説、童謡、童話、生活故事、諺語など、ほとんど民間伝承とも呼ぶべきあらゆるジャンルを含んでいる。これらはシボ族の生活全般を反映しており、これらを歌ったり話したりしているうちに、人びとは自らの民族性を習得すると言えるだろう。また、何らかの機会に、これらをたとえ偶然にもせよ、耳にした外部の人は、この文化のカタチのユニークさを知ることになるであろう。文化のカタチとは、このように部外者に対しても、これを見せ、自他の民族の違いや類似性を認識させる作用を持っている。

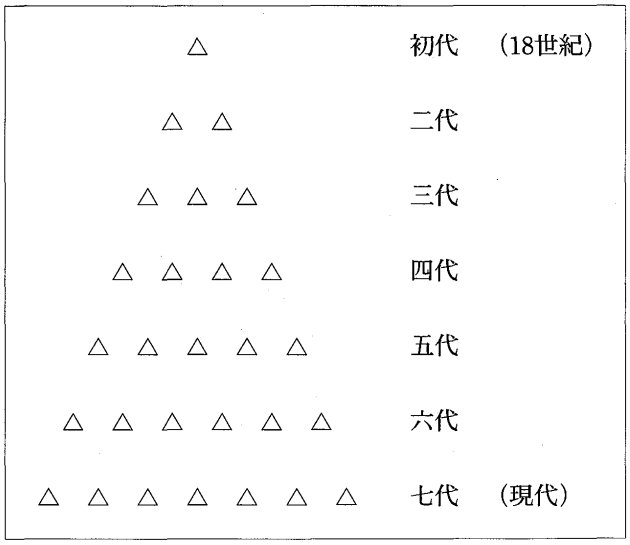


**図1　墓地の配列（チャプチャル第五郷墓地）**

(4)　親族関係のカタチ　シボ族で「哈拉莫昆（はらもくん）」と呼ぶ家族集団がある。哈拉とは姓のことであり、莫昆とは「氏族であり、家族に相当する」という[11]。つまり、哈拉莫昆とは、同姓の家族の名称である。その哈拉、つまり家族の姓は父親から由来するものであり、本来シボ族社会は父系出自を特徴としているので、哈拉莫昆は一種の父方祖先を共有する親族集団であると言うことができる。哈拉莫昆には、大きなものは100人以上からなるものもあれば、それ以下の小さなものもある。地縁集団として、シボ族の最小の社会単位は嘎善とか牛録と呼ぶが、そこにはそれぞれ20種類くらいの哈拉と数十戸くらいの家族が住んでいる。

哈拉莫昆は親族集団であるが、同時に相互扶助の機能集団でもある。シボ族は古くから特定の宗教的または政治的集団を形成することはなかったので、哈拉莫昆がある程度の機能集団として活動している。たとえば婚姻や葬儀、天災などの場合には相互扶助がなされるが、重大な犯罪事件などの場合には、哈拉莫昆会議（氏族会議）が開かれることもある。代表者としての哈拉達（哈拉長）あるいは莫昆達（莫昆長）は争議を調停したり、解決できなければ官憲に連絡することになる。

シボ族は父系社会であるから、もし同じ哈拉に男性構成員が多ければ、哈拉の規模は大きくなるが、女性が多ければ、その後の哈拉の規模は小さくなる。女性は本来、結婚して夫の莫昆に移るので、死んだら自分の哈拉の墓地ではなく、夫の方に埋葬されることになる。

哈拉長は哈拉構成員の合意によって選ばれる。哈拉長として選ばれる人は、人格高潔で人々から尊敬される人である。上記のような紛争解決の調停資格を持ち、実際に人々から丁寧な挨拶を受ける。哈拉長の家には、その哈拉の家譜がある。彼は毎年正月になると哈拉会議を開き、自分の哈拉内における人的移動を確かめ、これを記録するのである。

シボ族にも婚姻規制がある。それは「同姓不婚」の原則である。これは韓国において今日でも堅く守られてきた婚姻規制であるが、日本ではほとんどない。漢民族の習慣としても、今日では同姓の婚姻も法的に認められている。この点、シボ族の慣習は韓国のそれに近いが、しかし今日では実際の血縁関係がかなりの世代を経て遠くなったと思われる場合は、同姓の婚姻も可能となっている[12]。

チャプチャル第五郷はシボ族の伝統文化を最もよく保持している地域であるが、その村はずれに墓地がある（添付写真参照）。墓石の配列は、西遷してきた初代を元祖として、二世、三世と順に並ぶ。つまり、元祖を頂点とする二等辺三角形の底辺に最新の世代（現世代の父の代で七世）を配置するようになっている。1764年の西遷から約240年余という歳月は、ライフスパンでほぼ八代に相当するので、最新の墓碑が七代目になるのも、合理的でうなずける。この墓石の三角形配列は、時間を縦とする時空の観念を表出するものとして理解できる。

(5)　儀礼の文化的カタチ　シボ族にも儀礼は多い。儀礼の場合、儀礼そのものがすでに何らかのカタチをなしている。前項の親族のカタチを表そうとすれば、親族に関連するさまざまな具体的行動をある種のカタチとして認める作業が必要であるが、儀礼の場合、逆に儀礼に含まれたシンボリックな行為体系の中から何らかのメッセージをくみ取るという課題がある。この作業は困難ではあっても、やりがいのある作業であり、時として相手側と非言語的レベルで交流できるかも知れない。

シボ族の儀礼として第1に触れたいのは、シリママについてである。シリママとは、漢字で喜利媽媽（または希林媽媽）と書く。これは西の部屋の東南の隅みから西北の隅みに1丈9尺（約6.3メートル）または2丈9尺（約9.6メートル）の長さのひもを張り、これにミニチュ

**図2　墓碑の配列**

**図3　錫伯族代々の墓標**

アの弓、えびら（箭袋、矢を入れる袋）、ミニチュアの揺りかご（吊り寝台）、背式骨（比石、羊や豚の膝の骨）、ミニチュアの木の鍬、ミニチュアの靴、扳子（クリップ、挟み）、五顔六色の布切れ、銅銭などを吊す。ここで、ひもの長さが一丈九尺（または二丈九尺）というように、九という数字に意味がある。それは九が久に通じるからであり、それは長寿と家族の永続的繁栄を意味するからである。更に、ここに吊す小物の数も九個でなければならないというのも同じ意味である。背式骨の背とは、輩と音が通じる（bei）。輩とは家族親族のまとまりを意味している。弓やえびらは男の子を表し、布切れは女の子を示す。揺りかごや靴は子孫が多いことを示している。またえびらや扳子は男児の健やかな成長と馬術・弓術に優れることを祈るために吊す。木の鍬は豊作を、また銅銭は生活が富裕になることを祈るからである。喜利媽媽のための特別の祭壇のようなものはない。喜利媽媽のひもやこれらの小物は、普段は袋に詰めてしまっておくのであるが、毎年、大晦日になると袋から取り出して飾り、２月２日にはまた袋にしまうことになっている。

喜利媽媽の喜利とは、引くとか伸長する、継続する、延引するという意味があり、家族の長寿、永続、繁栄を祈願するという意味がある。一方、媽媽とはもちろん母親を意味する（漢語）が、ここでは特に娘娘神（女神）のことである[13]。そのことはシボ族が本来、母系社会であったことを意味しており、喜利媽媽は無文字時代における家譜であったという説がある[14]。確かに、なぜ「媽媽」が出るのか、判然としないが、もしこの母系先行説が正しいとすれば、今日の父系出自の原理がいつ母系から転化したのか、家父長制の台頭がどのようなものであったのか、興味深いところではあるが、今は詮索することができない。

90年代の中頃、筆者はチャプチャルであるシボ族の高齢婦人を訪問したことがある。彼女は盲目で寡婦であった。彼女に喜利媽媽のことを尋ねると、彼女は質問に答えず、しばらくして「日本人のあなたがなぜそんなことを尋ねるのですか？」と言った。文化大革命の頃、喜利媽媽は迷信であるから、と言う理由で禁止されていたので、この質問が唐突に聞こえたらしい。しかし、この質問によって彼女は抑えていた喜利媽媽への思いを解き放たれたかのように、涙を流しながら蕩々と語り出した。出来ることなら、自分が喜利媽媽を作りたい、と言うのであった。彼女は自分が目が見えなくなったのも、夫が亡くなったのも、喜利媽媽に祈りをしなかったからだ、と言った。

近年、喜利媽媽に対するかつてのような社会的抑圧はなくなった。チャプチャルに開園されたシボ族民俗民族館にも他の多くの出し物と同様に、喜利媽媽を紹介するコーナーがあり、立派な説明がなされている。これは公的施設であり、宗教的施設ではないが、喜利媽媽を一つの民間信仰として扱う社会的ゆとりができたものと思われる。

喜利媽媽は、いまだ漢民族、その他の民族にはほとんど知られていない。それどころか、シボ族自身でも、若い世代にはほとんどなじみがないのかも知れない。しかし、過去数百年来、継承されたシボ族の魂の営みに関する儀礼がよしんば現実に実行されていなくても、ふたたび公の場に展示されるようになったことは注目に値しよう。それが民族文化のカタチの一つとして自他共に認知される機会となると考えられるからである。

(6)　感性のカタチ　シボ族の感性について記述するには、まだ調査研究が十分でない。それは研究者自身が彼らの感性の表現を十分に把握するまでに至っていないということであり、おそらくそれは今後とも簡単ではなかろうと思う。たとえ、何かを感じ取ることができたとしても、それをここで論文として記述説明することは全く別の努力を必要とするであろう。それはあながち、筆者の感性の問題だけではなく、そもそも現地において異文化にふれ、これを理解し、表現しようとすること、そして現地の人、つまり異文化を担う人びとと「共感できた」と叫ぶことの困難さを予測させるものかも知れない。そのことは、ここで提唱しようとする民族のカタチの一つとして、《感性》を取り上げようとすることの方法論的困難

さを自ら認めることとならざるを得ない。しかし、これを認めても、理念としては、異文化の民族に少しでも接近し、これに触れ、これを理解しようと試みること自体は許されよう。初めから事態の困難さに観念し、これを無視または放棄するよりは、研究者がそれぞれの角度から、少しでもこの民族の感性の姿を把握する姿勢と努力はあってもよいであろう。但し、そうはいっても現在のところ、筆者にはその準備が十分でないので、感性に関する何らかのカタチを、ある種の象徴的な方法で表出することを今後の課題としておきたい。

## 注

(1) 本研究の基礎となる現地調査は、日本学術振興会による科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号18520637、研究代表者丸山孝一、2006～08）および九州・シルクロード協会からの研究費補助金（2006年）に依拠していることを明記して感謝の意を表したい。また、本論文は日本文化人類学会第40回研究大会（2006年6月、於東京大学）における報告「中国シボ族の時間と空間」（C－3）に加筆し、これを発展させたものである。
(2) 丸山（2006a、2006b）
(3) ここで言う東シボとか西シボという名称は、筆者が便宜的に使っているだけで、一般名称ではないことを断っておく。
(4) 李　2001：74
(5) 黒龍江省を流れる松花江の支流でチチハルを通過する河川。
(6) 佟加・慶夫　1999：3－4
(7) 佟克力　1996：58
(8) 同上
(9) 体詞とは、名詞、代名詞、数詞、量詞などの総称である。
(10) 佟克力　1996：63－66
(11) 賀霊、佟克力　1994：38
(12) 賀霊　1998：128
(13) 瓦霊　1995：260
(14) 中国民族大事典（Xilimama）

## 参考文献

丸山孝一　2006a「シボ族文化変容試論」福岡女学院大学大学院紀要（臨床心理学）第3号81－86ページ
丸山孝一　2006b「シボ族の世代別墓碑配列」『シルクロード』（九州・シルクロード協会誌）Vol.16、19－20ページ
スターリン、I.「民族問題とスターリン主義」全書刊行会訳、国民文庫社
Benedict, Ruth 1934 Patterns of Culture. New York: Mifflin（米山俊直訳「文化の型」社会思想社、1973年）
デュルケーム、E. (E. Durkheim)、1895　Les règles de la méthode sociologique（田辺寿利訳「社会学的方法の規準」1952年、創元社）
李耕耘　2001「新疆・伊犁風物志」雲南人民出版社
佟加・慶夫　1999「西域錫伯人」新疆大学出版会
佟克力　1996「錫伯族」新疆美術撮影出版社
克力、博雅、奇車山　編　1990　「錫伯族研究」新疆人民出版社
蘇徳善　1990「関于“吉甫西”語的探討」克力他編(1990)所収
賀文君　1990「塔城喀拉哈巴克郷錫伯族社会文化調査」克力他編（1990）所収
賀霊　1998「錫伯族親族及其称謂」『錫伯族研究文集』第1輯、新疆人民出版社
賀霊、佟克力　1994「錫伯族風俗誌」中央民族大学出版社
瓦霊主編　1995「錫伯族百科全書」新疆人民出版社